

年間第四主日

2010.1.31

(ルカ 4:21-30)

今日の福音は先週の日曜日の福音に続く、ナザレの会堂でイエスのみことばを聞いた人々の驚きとその後の行動が語られる箇所です。今日の福音の、ナザレの人々のイエスのことばに対する反応の激変ぶりと、その後のイエスに対して取った行動の過激さは、私たちが戸惑わせるのに十分すぎるほどです。何がナザレの人々をあのような過激な行動に走らせたのでしょうか。ナザレの人々のイエスに対する反応の激変ぶりは、今日の福音の箇所を読むだけでは、私たちにはついて行くことができないように思えます。

今日の福音は、ルカ福音書に語られているナザレでの出来事の場面ですが、同じナザレでの出来事は、マタイ福音書にも、マルコ福音書にも伝えられています。それで、ミサの中でこのようなことをお話しするのは、理屈っぽく聞こえて、皆さんを退屈させるとは思いますが、三つの福音に記されているナザレの出来事を手短かに比較してみることにいたします。

マルコ福音書の6章のナザレの場面の最後の部分を見ると「そこでは、つまりナザレでは、ごくわずかな病人に手を置いて癒されただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰に驚かれた」と締めくくられています。マタイでは、「人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった」となっており、いずれも、ナザレの人々がイエスを崖から突き落とそうとしたことは語られていません。何故ルカ福音書には、他の福音書に語られていない、ナザレの人々のイエスを殺そうとするまでの激昂ぶりが記されているのか、その理由はさまざまに考えることが出来ると思いますが、聖書の専門家は、三つの福音書のこの違いはルカ福音書の著者が特別な意図をもってこのナザレの場面を書き記しているからだと言うふうに説明しています。このような意見に従って、あらためてルカ福音書の前後関係を読み直してみると、他の福音書ではイエスの宣教活動の中ごろの出来事として語られているナザレの出来事が、ルカ福音書では、荒れ野の四十日間のサタンの誘惑の記事のすぐ後、イエスの宣教活動の最初の出来事としてとして語られています。

イエスの最初の説教としてルカ福音書が取り上げている、イザヤ預言書を朗読されたイエスが、「この聖書のことばは、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言われたことは、他の福音書には出ていません。「預言者は自分の故郷では歓迎されないものだ」というおことばは、他の福音書では、ナザレの人々の反応を見て取った後でイエスの口から出ているのに対し、ルカ福音書では、イエスのほうから挑戦的に、最初に語りだされています。それに続いて旧約のエリヤ

とエリシャの故事を引き合いに出して、ナザレの人々がイエスに期待していたことを、頭から拒否するようなイエスのことばに激昂して、ナザレの人々はイエスを崖から突き落とそうとしたのです。ルカ福音書では、何故イエスはこのようなふるまいをしたのでしょうか。ここにも、この物語をイエスの宣教の最初の出来事として語る、ルカ福音書の特別な意図が隠されていると聖書の専門の先生方は考えています。

ナザレでの出来事が、ルカ福音書ではイエスの宣教の最初の出来事として語られるのは、それに続く十字架の死に至るまでのイエスの宣教がどのような道をたどったのか、そしてイエスの十字架の死後どのようなことが起こったのかということ語るルカ福音書の全体の、いわばプロローグとして、あらかじめ示すためです。もう少し分かりやすく言えば、イエスは何故当時のユダヤの人々によって十字架の死に追いやられたのか、また、それにもかかわらず何故、イエスのもたらした福音は、イエスの復活の後に弟子たちの宣教によって、ユダヤ人の枠を超えて異邦人の世界に広がっていったのかという疑問に答えるために、その全体は神が最初からイエスにお与えになっていた使命の実現であることを語るために、ルカ福音書はこのナザレの出来事をイエスの宣教活動の最初に語っているのです。

ここで少し、先週の福音を思い起こしてみると、ナザレの会堂でイザヤ預言書の一節を朗読されたイエスは「この聖書のことばは、今日、あなたがたが耳にしたとき実現した」と語られたのでした。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げるために、主がわたしに油を注がれたからである・・・」イエスは預言者によって告げられていた、神のことばはご自分において実現していると宣言されたのでした。それを聞いたナザレの人々は、驚きながらも、それなら、皆がイエスのことをよく知っている、イエスの故郷であるこのナザレの私たちの前で、そのしるしを見せよと心の中でつぶやいたのです。そのような人々の思いに対して、イエスははっきりと拒否の姿勢を示しておられるのです。何故イエスはそのような態度を取られたのでしょうか。ここで、今日の福音によって始まるイエスの宣教活動の前に語られている、荒れ野でのサタンの誘惑の物語を思い起こす必要があります。荒れ野の誘惑は三つありましたが、煎じ詰めれば、イエスが神の子としての力を人々の前に示すことによって、人々の支持を得て、それによってイスラエルのメシア、新たな王となることへの誘惑です。イエスは、ただ神にのみ従えという聖書のことばをもって、そのサタンの誘惑を退けたのでした。イエスがナザレの人々の心の思いを知らながら、それを拒否されているのは、ナザレの人々のイエスへのひそかな期待の中に、荒れ野の誘惑と同じ、イエスが神から与えられている使命を妨げようとする誘いを感じ取っておられるからです。

ナザレで起こったことは、イエスの宣教活動の間、ずっとイエスに付きまとうことになった、神がイエスに与えておられる使命と、人々の人間的な思いのすれ違いの始まりです。人々はイエスが彼の言うように、神から遣わされた者であるなら、自分たちの中でそのしるしを見せよと、イエスに要求し続けたのです。しかし、それは荒れ野のサタンがイエスを試みた誘惑の人間の社会への投影です。イエスは神から与えられた使命を果たすために、その人々の要求を拒否し続け、ついには十字架に迫いやられます。しかし、まさにその十字架の死をもって、神がイエスの与えられた使命を実現されたのです。そのことの証がイエスの復活であり、イエスがもたらした福音のユダヤ人たちの枠を超えた世界的な広がりであると、ルカ福音書はその全体を通して私たちに語っているのです。

イエスが神の子なら、どうして今、私たちの目の前で、わたしたちの願いに応えることによって、そのしるしを見せてくださらないのかという思いは、ナザレの人々だけではなく私たちの中にもある思いです。そのような思いにさらされると、私たちはイエスとともに、荒れ野の誘惑にさらされているのだということを、今年の年間主日ごとに味わうルカ福音書を通して学んでゆきたいと思えます。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高